BOOK IX — 自由の代償

第10章 — 消失点

01 — 真夜中過ぎの街路

ロイが最初にたどり着いた通りには、ほとんど人がいなかった。舗道の縁を流れる水が、あふれ始めた排水口へ紙くずを運んでいた。閉店したレストランの前には配送車が停まっていた。運転手はハンドルの向こうで眠っていた。

ロイには、これからの数分間、特に向かうべき場所がなかった。最後にレイチェルを見た場所から少しでも離れたかったが、身体が移動できる距離は次第に短くなっていた。

安価な腕時計がいくつも並ぶ店のショーウインドーの下で足を止めた。どの時計も同じ時刻に合わせてあった。手首の時計は、午前一時が近いことを知らせていた。

レイチェルに電話をかけようかと考えた。別れてから何度も考えたことだった。そのたびに、音を立ててはならない場所で電話が鳴るのを想像した。

電話には手をつけなかった。

腕時計の上のスクリーンには、市当局の告知が表示されていた。当局は一部の交通機関の運行停止を、追って通知するまで延長した。移動を中断させられた人々には、自宅にとどまるか、指定された公共施設で支援を求めるよう勧告していた。

指定された施設のうち、いったいどこなら自分を支援を求める人間として認めてくれるのだろう、とロイは思った。

画面が切り替わった。彼の写真が現れた。その下には新しい一文があった。

対象は機密技術を所持している可能性がある。

彼は二度読んだ。告知を書いた者がレイチェルの包みの中身を指しているのか、自分の身体の内部構造を指しているのか、判断できなかった。書いた人々にとっては、もはやその区別に意味はないのかもしれなかった。

食料品の入った袋を二つ提げた女性が角を曲がってきた。スクリーンの前に立つ彼に気づき、歩みを緩めた。ロイは彼女を通すために脇へ寄った。女性は画面を見て、次に彼を見た。

一瞬、何か言うのかと思った。

だが女性はそのまま歩いていった。隣の建物の入口で立ち止まり、片方の袋を下ろして鍵を探した。彼女の背後で扉が閉まる音が聞こえた。

女性が自分に気づいたのかどうか、彼には分からなかった。ただ、自分を見た一人ひとりが何を理解したのか確かめようとして、残りの夜を費やすわけにはいかないことは分かっていた。

不調の原因はもう肩だけではなかった。肋骨の下の奥深くに痛みがあり、右脚の動きも以前ほど確かではなくなっていた。許容出力の範囲内でも、負荷と負荷の間に十分な回復時間がなければ、繰り返しの負荷によって損傷が生じ得ると、イマニは警告していた。

彼は七十という数字を覚えていた。だが、その数字が意味を持つための条件をすべて守れる状況にはなかった。

通りの突き当たりで、屋根の下にある公共のベンチを見つけ、腰を下ろした。道路の向こうでは集合住宅の上層階に明かりがついていた。雨にもかかわらず、誰かが窓を開けていた。見えない部屋から、かすかに音楽が聞こえてきた。

記憶にある自分の死から十一年後、初めて目を覚ましたとき、彼はなぜまだ生きているのか、その説明を求めていた。今はただ、朝まで眠れる雨の当たらない場所があればよかった。

集合住宅の窓を光が横切っていった。

その光が地面に届く前に、彼は立ち上がった。

02 — 命令の及ぶ範囲

ヴェイル大佐には作戦を指揮するための別の部屋が与えられていた。病院の管理棟は、増え続ける関係機関から離れすぎており、通信設備もこれほど大規模な作戦に対応するよう設計されてはいなかった。

新しい部屋は地域司令部の施設内にあった。最大のディスプレイには、行政区に分けられた市内の地図が表示されていた。もう一つのディスプレイには、民間の行政機関から届く報告が流れていた。告知の大半は、作戦とは何の関係もない人々についてのものだった。

デレンが到着したのは午前一時を少し過ぎた頃だった。身柄の移管を試みた際の記録と、病院から寄せられた異議申し立てを持参するよう指示されていた。

ヴェイルは彼の手のファイルに目をやった。

「それは補佐官に預けておけばいい」

「北側病棟への通行を再開するよう要請が来ています」

「医療当局に必要な経路を特定させろ」

「三時間前に済んでいます」

大佐は顔を上げた。病院への対応は別の士官に任せるとデレンに告げた。彼を呼んだ目的は、対象の状態について、自ら見たものに基づく評価を聞くことだった。

デレンは目撃したことを説明した。ロイは身柄の移管が試みられる前から負傷していた。二度目の対峙で傷が悪化したことは、ほぼ間違いなかった。対象が機密指定要員との長時間の交戦に耐えられると考える理由はなかった。

「ならば回収は難しくないはずだ」

「閣下が許可された方法で回収された場合、彼が生き延びられるとは限りません」

ヴェイルは、それが医学的な結論なのかと尋ねた。

「いいえ。彼が椅子から立ち上がろうとするところを見た者としての結論です」

テーブルについていた他の者は誰も口を開かなかった。ディスプレイに新たな報告が表示された。住宅地区の交差点近くで対象に似た男を見たと、一人の運転手が通報してきた。目撃時刻は定かではなかった。

ヴェイルはその報告も他の情報と合わせて評価するよう命じた。それから統合幕僚部から届いた覚書に目を移した。要請があれば機密指定要員を追加投入できるという確認が記されていた。該当する要員の身元は文書に含まれていなかった。

技術の回収に関する補足事項もあった。生きた対象を保全することと、国家安全保障上不可欠とされる物質の喪失を防ぐことが両立しなくなった場合、現場指揮官には引き続き第二の指示に基づいて行動する権限が与えられていた。

デレンは当初の文言を読んでいた。何の権限が残されたのか理解していた。

「女性の方は？」

ヴェイルは別のページをめくった。レイチェルについては、事情聴取と研究資料の回収のために拘束することになっていた。彼女の分類はロイとは別のままだった。だが、その区別があっても、一般向けの告知では彼女も同じ脅威の一部として扱われていた。

デレンは、この命令によって拘束された人物が不服を申し立てられる独立機関はあるのかと尋ねた。

「それは今回の説明の範囲外だ」

予想していた答えだった。そして、自分がそうした答えを予想するようになっていたことが気にかかった。

数分後、ヴェイルは彼を退出させた。部屋を出る途中、デレンは入室を待つ制服姿の士官三人とすれ違った。誰にも見覚えがなかった。一人が、夜のうちに軍が直接の連絡体制を確立した機関の一覧を手にしていた。

作戦は、一人の患者を病院から連れ出そうとしたことから始まった。朝までには、彼に関して何らかの対応を求められていない市の部署を見つける方が難しくなるだろう。

03 — 問われることのない部屋

ロイは、かつて業務用の洗濯施設だった建物の入口で雨をしのいだ。施設の一部はまだ使われていた。仕切りの向こうでは、機械が規則正しい金属音を立てて動いていた。

雨が弱まるまでは立っているつもりだった。しかし壁に近づこうとしたとき、脚の力が抜けた。左手で身体を支えた。その物音を聞きつけて、仕切りの向こうから男が出てきた。

男はロイが思っていたよりも年配だった。服の上から汚れたエプロンをつけていた。プラスチックの容器を手にしていたが、ロイを見ると床に置いた。

「大丈夫ですか？」

「少し座らせてもらえませんか」

男は椅子を持ってきた。ロイが苦労しながら腰を下ろすのを見れば、用意していた説明はもう必要なかった。

男は誰かに連絡しようかと尋ねた。

「いいえ。ありがとうございます」

「隣の通りに、開いている診療所があるはずです」

ロイは首を横に振った。

男はしばらく何も言わなかった。洗濯場に戻り、温かい水を入れたカップを持ってきた。ロイは左手で受け取った。

仕切りの向こうの壁には小さなテレビが取りつけられていた。音量は絞られていたが、病院とその外に停まる車両の映像が放送されていた。ロイの写真が映し出されると、男はテレビに目を向けた。

ロイはカップを置いた。

「もう行かないと」

男はすぐには答えなかった。入口を見て、それからテレビを見た。

「娘が病院で働いているんです」と男は言った。「あの病院じゃありませんがね。何が起こっているのか、そこで働いている人たちには、起こった後になるまで教えてもらえないそうです」

男はカップを取り、もう一度水を注いだ。

「あなたが何をしたと言われているのか、私は見ていない。実際に何をしたのかも知らない。でも、立っていられないことは分かります」

ロイは椅子に座ったままだった。

男は、洗濯場の奥に使っていない部屋があると説明した。週末までに片づけるつもりだった部屋で、テーブルと古い毛布が何枚かある。しばらくならそこで休んでもいいが、朝の従業員が出勤してきた後まで置いておくことはできないという。

それは味方になるという申し出ではなかった。男は研究のことも、憲章のことも、民間人と製造された人間の間にある公的な区別のことも何一つ知らなかった。男は恐れていた。扉に手を伸ばしたとき、その手が震えているのをロイは見た。

「そんなことをしてくれる義務はありません」とロイは言った。

「分かっています。少しの間だけです。それだけです」

部屋には洗剤と湿った段ボールのにおいがした。ロイは低い木の台に座り、背を壁に預けた。男は毛布を置いて仕事に戻っていった。

交差点を離れて以来初めて、屋外の街の音とは別の音が聞こえた。壁の向こうでは機械が動き続けていた。時折、音が止まり、また始まった。

病院で彼を取り囲んでいたのは、彼について並外れた量の知識を持つことを仕事の前提としていた人々だった。ここで椅子を与えてくれたのは、彼についてほとんど何も知らない人間だった。

彼は目を閉じた。

ほんの数分だけ眠るつもりだった。

04 — 残された記録

レイチェルは眠らなかった。

彼女が身を寄せた建物は地域の住民団体のもので、その団体は移動できなくなった人々に待合スペースの使用を許していた。午前二時までには、誰かが二つ目の湯沸かし器と折りたたみ椅子を何脚か持ち込んでいた。

彼女はテーブルの端に座り、コートの下に包みを隠していた。隣の部屋では人々が交通機関の告知について話し合っていた。病院での診察予約を取り消された親族について、情報を得ようとしていた男もいた。

彼女は会話には加わらず、聞いていた。

持ち出した書類のうち最も重要なものが、必ずしも最新のものとは限らなかった。失敗に関する記録がいくつかあった。ある記録は、一見良好に見えた反応の後に試料の状態が悪化した試

験について記していた。別の記録には、単離した物質の挙動によって、完全な身体の中で起こることを確定することはできない、というエイドリアンの警告が書かれていた。

その観察結果がなければ、研究を引き継ぐ者が、期待できる結果を治療の成功と取り違えるかもしれなかった。

実験の過程で発見した古い資料もあった。それは不完全であり、分類の一部は、その後公表された研究の説明と整合しなかった。レイチェルはそのことについて、もう一度エイドリアンに尋ねたかった。軍が病院に入ってきたとき、その機会は失われた。

彼女は不一致の理由を説明できなかった。ただ、そうでなければ失われてしまうかもしれない一つの疑問を持っていた。

ボランティアの女性が、何か必要なものはないかと尋ねた。

「朝になったら行ける場所があるといいのですが」

女性は、交通当局から次の告知が出たら、利用できる宿泊施設の一覧を用意すると答えた。それ以上の情報を伝えられないことを詫びた。

レイチェルは礼を言った。

高架道路の下でロイと話し合った場所のことを考えた。そこへ着いたら待っているつもりだった。だが今では、二人のどちらかでもその場所にたどり着けるのか確信が持てず、ロイが商業地区を抜けられたのかさえ分からなかった。

携帯電話を開いた。彼からのメッセージはなかった。

一瞬、何も連絡が来ないことに腹を立てた。沈黙を守ることが彼にできる最も賢明な行動かもしれないと分かっていた。それでも、何も表示されていない画面を見るのが楽になるわけではなかった。

彼女は包みに向き直り、観察記録が研究室から持ち出されたときの状況について、短い覚書を書いた。時刻と管理の経緯について、確認できることを記した。研究が盗まれたとも、救い出されたとも、完了したとも書かなかった。どの言葉も、起こったことのすべてを表してはいなかった。

最後に日付を加えた。真夜中は過ぎていた。二人が群衆の別々の側に立っている間に、新しい一日が始まっていた。

彼女は覚書を折りたたみ、残りの書類と一緒にした。

窓の向こうの通りはまだ暗かった。レイチェルは、ロイが横になれる場所を見つけているところを想像しようとした。他の可能性まで想像してしまうのを止めることはできなかった。

彼女は立ち上がって、もう一杯お茶をいれに行った。彼から答えが来なくても、できることだった。

05 — 一人で戻った男

M-04が地域司令部の施設に到着したのは夜明け前だった。他の二人の機密指定要員には、それぞれ別の任務が与えられていた。病院で対象と遭遇した際のことを報告するよう求められた。

聴取を担当する士官は、作戦前に提供された資料にはなかった能力をロイが示したかどうか、確かめようとしていた。M-04は観察した動作を説明した。自分が阻止した動作と、そうでなかった動作を区別した。

「対象によって負傷したか？」

「いいえ」

「対象が抵抗を続けられなくなった理由は特定できたか？」

「右半身の機能障害を確認しました。その原因は特定していません」

士官は診断棟の構造物が崩落した件について尋ねた。M-04は記憶しているとおりに、一連の出来事を説明した。負傷した民間人が運び出される間、天井の一部がそれ以上落下しないよう支えていた。その間に対象はその場を離れていた。

「その救助を行うよう命令されたのか？」

「いいえ」

「対象を逃がすよう誰かに指示されたのか？」

「いいえ」

士官は書く手を止めた。なぜそのような行動を取ったのか、M-04に尋ねた。

「残った構造物が崩落するまでに民間人を運び出す時間が足りませんでした」

「そういうことを聞いているのではない」

M-04は待った。

士官は質問を繰り返した。M-04の表情には目に見える変化はなかった。同じ答えを返し、対象がその場を離れることは自らの行動の目的ではなかった、と付け加えた。

その点について結論が出ないまま、聴取は終わった。

廊下では医療スタッフが彼の両手の状態を診察した。コンクリートが手に当たって砕けたところに、小さな切り傷がいくつかあった。スタッフは傷を洗浄し、感覚が失われるようであれば報告するよう求めた。彼はそうすると答えた。

それから新たな任務の詳細を知らされた。対象の所在が判明するまで、現場司令部の指示に応じられる状態で待機することになった。対象であることが確実に確認された場合は、該当地区にすでに配置されている要員を支援することになっていた。

M-04は、前回の遭遇以来、対象の医学的な状態に変化はあったかと尋ねた。

指示を伝えた士官は、信頼できる評価は得られていないと答えた。

「評価が得られた場合、それは提供されるのでしょうか？」

「任務に関係があればな」

M-04は任務を了解した。隣接する待機室へ向かうよう指示された。

壁にはテレビがあった。その日の朝最初の国内ニュースを放送していた。キャスターは、危険な人物から市民を守るための作戦について話していた。病院で撮影された短い映像には、入口の屋根の下に到着する数台の軍用車両が映っていた。

M-04は映像が終わるまで見ていた。それから腰を下ろした。

市民に伝えられた報告と、たった今自分が終えた報告との違いについて、説明を求められてはいなかった。

彼は自ら説明しようとはしなかった。

06 — 最後の見覚えのある通り

扉を開ける音でロイは目を覚ました。一瞬、レイチェルがいると思った。完全に目が覚める前に、その予想は消えた。

洗濯場の男が戸口に立っていた。外は明るくなり始めていた。もうすぐ従業員たちが来る。ラジオでは周辺地区でいくつかの検査が行われていると伝えていた。

ロイは部屋を貸してくれたことに礼を言った。起き上がろうとする前に毛布をたたんだ。男はその様子を見て、椅子を近くへ持ってきた。

「医者に診てもらう必要がありますよ」

「分かっています」

「それでは遠くまで行けないでしょう」

ロイは右手を見下ろした。昨夜ほど冷たくはなかったが、手を握るにはまだ意識的に力を入れる必要があった。

「ゆっくり行きます」

男は小さな水のボトルを渡してくれた。ロイが差し出した金は受け取らなかった。それから扉を開け、脇へ寄った。

外では雨がやんでいた。街は暗闇ではなく、灰色に包まれていた。店がいくつか開き始め、交通機関の停留所の近くでは通勤する人々が待っていたが、始発便がいつ来るのかを知らせるものはなかった。

ロイは遠くに見覚えのある通りを見つけた。病院に入る前、レイチェルと来たことのある場所だった。当時はまだ、公共の告知が出るたびに自分たちの状況が変わったと考えずに、その地区を移動できた。

彼はその通りへ向かって歩き始めた。

ある建物の入口に、住民宛ての告知が貼られていた。係官から身分証明書の提示と共用部分への立ち入りを認めるよう求められる場合があるという。告知には一時的な治安措置と書かれていた。終了日は明記されていなかった。

さらに先へ進むと、交差点のそばに軍用車両が停まっていた。人々は隣接する通りの一つに入らないよう誘導されていた。当面の間、道路は閉鎖されたままだと係官が説明する間、ロイも他の人々とともに立ち止まった。

向こう側の通りが見えた。かつてレイチェルが足を止め、彼のために何かを買ってくれた店を思い出した。そこは待ち合わせを約束した場所ではなかった。だが店を目にすると、彼女のもとへたどり着くという思いが、耐えがたいほど身近に感じられた。

そのとき、車両の陰から灰色の服を着た男が出てきた。

ロイはその顔にもコートにも見覚えがなかった。男は制服姿の要員の一人と話していた。外見に変わったところはなかった。ただ、すぐそばの人々を見るために身体の向きを変えた、その動きの正確さだけが異様だった。

ロイは、対峙に備えようとする、いつもの衝動を感じた。男の方へは動かなかった。

診断棟のことを思い出した。女の手が自分の腕に触れたこと、彼女が動いた後、立て直す機会がまったくなかったことを思い出した。M-04は、その場で必要とされた以上のことをせずに、自分を止めることができた。

一晩が過ぎても、その事実が軽くなることはなかった。

係官は交差点の人々に、来た方へ引き返すよう告げた。ロイも彼らとともに歩いた。灰色の服の男が自分を見たかどうかは分からなかった。

歩けば歩くほど、その日のうちにレイチェルと話し合った場所へたどり着けるとは思えなくなった。

そうではないと自分に言い聞かせることはしなかった。

07 — 確認された所在の消失

午前六時半、ヴェイルは真夜中以降の目撃情報をまとめた報告を受け取った。ロイを目撃した可能性のある事例は三十件以上あった。何件かは、証言にあった男性の身元が後から判明したため、除外することができた。他には時刻や場所に矛盾があるものもあった。

レイチェルの所在を確定できる報告はなかった。

評価を報告した士官によれば、作戦部隊の管理下にあるロイを記録した最後の信頼できる資料は、前日の病院の映像だった。交差点近くの目撃者からは有用な情報が得られていたが、その後の報告は彼の移動を連続的に示すものではなかった。

ヴェイルは、彼が市外へ出たのかと尋ねた。

「その証拠はありません」

「まだ市内にいるという証拠は？」

「現時点ではありません」

市当局から、規制の範囲を縮小するよう要請が届いていた。朝の通常の交通手段が途絶えたことで、作戦の当初の対象地域をはるかに超える範囲で問題が生じていた。ヴェイルは複数の地区での運行再開に同意した。確保命令そのものに変更はなかった。

修正された指示が配布されたとき、デレンもその場にいた。ディスプレイ上で街の一部が通常の色に戻った。他の部分には、軍の活動を示す印がついたままだった。画面を見ていると、生活が正常に戻りつつあると想像することもできた。

デレンは夜の間に積み重なった病院からの苦情について考えた。正常という言葉は、それを提出した人々にとって、かなり違う意味を持つものだった。

大佐は正午に再び評価を行うよう求めた。それまでは機密指定要員を待機させておくことになった。

補佐官が民政当局向けの説明資料を作成し始めた。対象は軍事作戦から逃れたと記述すべきか尋ねた。

ヴェイルは、対象の所在はまだ判明していないと記すよう指示した。

デレンは「現在の所在」という見出しの横にある空欄を見た。以前は誰かが地区名を入力していた。しかし根拠となった報告が撤回された後、その記載も削除されていた。

ロイの写真はディスプレイに残っていた。

彼はまだ追われていた。まだ危険の中にいた。所在が確認されていないからといって、どちらの事実も消えるわけではなかった。

だが命令が発令されて以来初めて、大佐には、機密指定要員を送り込めばそこで彼を発見できると期待できる場所がなかった。

08 — 消失点

朝までに、ロイはおおまかにしか知らない街の一画へたどり着いていた。建物は古く、その多くは幾度となく改装され、もともと何のために建てられたのかも分からなくなっていた。その向こうには、未完成の開発区域がいくつも広がっていた。

使われなくなった商業用の建物の端に、雨風をしのげる場所を見つけた。快適ではなかった。長くとどまれる場所でもなかった。だがそこに座っていると、一晩中自分の写真を映し出していた明るいスクリーンはもう見えなかった。

携帯電話を取り出し、レイチェルの名前を見た。

まだメッセージはなかった。

交差点で別れてから、彼女に何ができたのか知るすべはなかった。どこか暖かい場所にたどり着いていてほしかった。包みをまだ持っていてほしかった。そして何より、自分がたどり着けなかったために、危険な場所に彼女がとどまっていないことを願った。

電話をかけずに、携帯電話をしまった。

目の前の壁を照らす光が変わりつつあった。街が一日を始める音が聞こえた。エンジンがかかる音、金属製のシャッターが上がる音、遠くの人の声。航空機の音もした。ほんの短い間で、他の音から聞き分けられないほど遠かった。

右手を見た。もう一度握ろうとした。動きは不完全だった。

かつての彼なら、握れなかったことを理由に、すぐにもう一度試そうとしたかもしれない。だが今は手を下ろした。

以前の力を取り戻したわけではなかった。百年の寿命があるわけでもなかった。研究室のディスプレイに示された数字は、自分の身体を顧みなくてもよいという許可ではない。それを理解するだけのことは、自分の身体について学んでいた。政府によって、もはや自分がその場で最も強力な製造された人間ではないことも思い知らされていた。

そのどの事実も、次に何をすべきかは教えてくれなかった。

だが、戻らなければならないと告げるものでもなかった。

高架道路の下に立っていたときのレイチェルの言葉を思い出した。そのときは、戦わないでほしいと言われているのだと思っていた。今は違う意味に理解していた。勇気ある者として何をすべきかを、敵に決めさせないでほしいと、彼女は言っていたのだ。

建物の向こうのどこかで、道路は二人が話し合った場所や、一度も見たことのない場所へと続いていた。そのどこまでたどり着けるのかは分からなかった。

病院へ戻ることはできなかった。自分を捕らえるために送り込まれた者たちに立ち向かうこともできなかった。今は、レイチェルと交わした待ち合わせの約束さえ守れなかった。

航空機の音が消えるまで、彼はじっと座っていた。

政府には、彼の身元が記された命令書と、彼の顔写真、身体が何をしたのかを示す記録があった。彼を止めることのできる男や女がいた。彼を殺す権限も撤回していなかった。

だが、彼がどこにいるのかは知らなかった。

ロイは頭を壁にもたせ、目を閉じた。危険が過ぎ去ったから休むのではなかった。次に目を開いたとき、立ち上がれるようにするために、休息を自分に許したのだ。

また別の道があるだろう。レイチェルのもとへたどり着こうと、もう一度試みることもあるだろう。

今は、彼は生きていた。

それで十分だと思うしかなかった。

第10章 終。